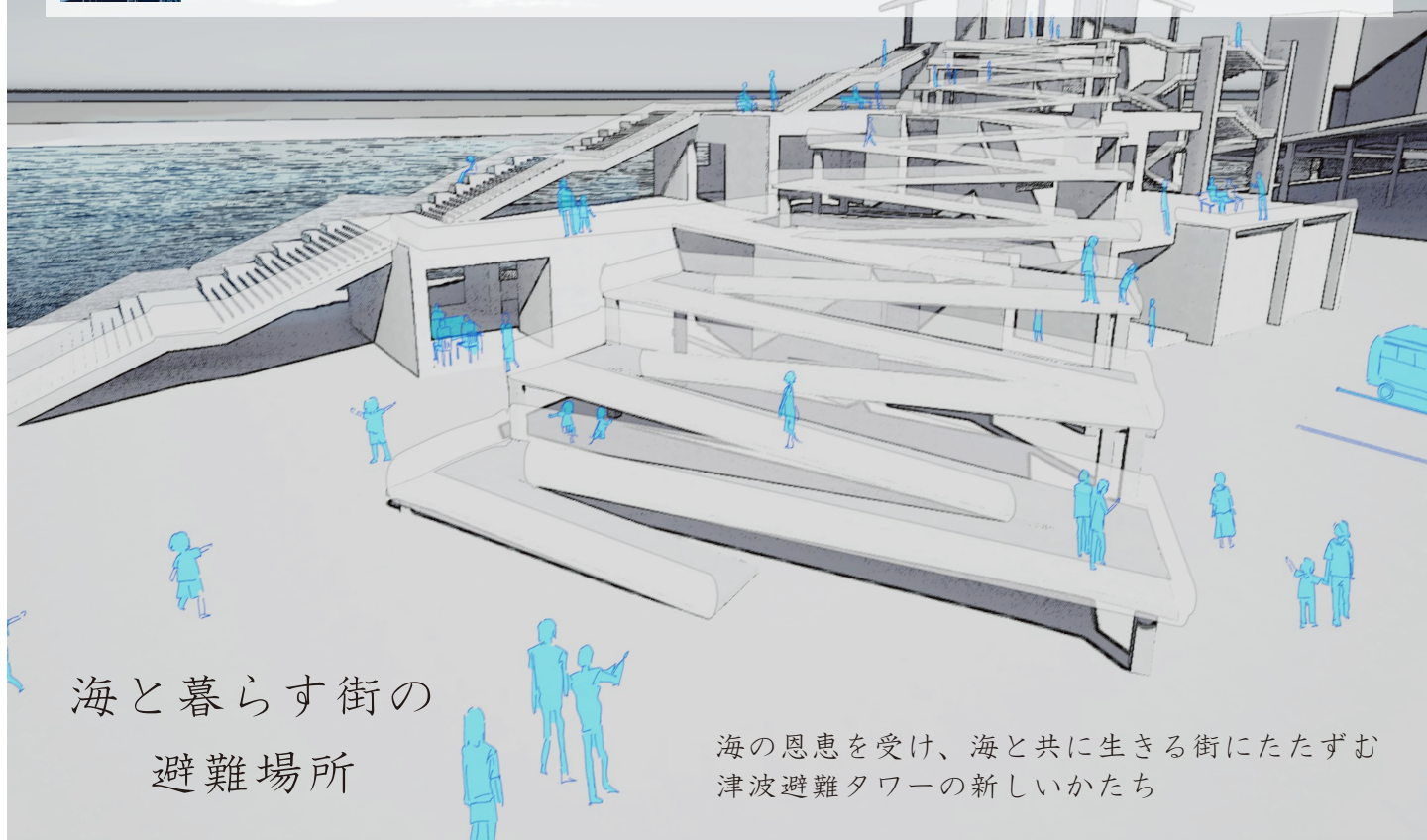




小松瑞貴
壁谷澤研究室

海と暮らす街の避難場所

敷地：静岡県用宗
用途：津波避難タワー



海と暮らす街の 避難場所

海の恩恵を受け、海と共に生きる街にたたずむ
津波避難タワーの新しいかたち

01 背景

社会背景

津波避難タワーの多くが、
武骨で経済的な鉄骨造である。

問題提起

災害時に避難者が逃げ込んだ
際、安心できる場所であるのか。

提案

日常的に利用される避難タワー
を設計し、地域に愛され、避難時
に安心感を与える建築を設計する。

02 コンセプト



日常時	習慣 (お祭り・祈願・初詣…)
災害時	避難場所 街の守り神
	復興の拠点

地域に根差す「神社」のような存在

日常時…住民たちの習慣・風習に根差し、居場所となる。
災害時…いつも行く場所・神様のいる場所の安心感を与える。
復興時…地域を守るものとして、港町再出発の拠点となる。

避難タワーとしての形状の提案

建築的合理性
災害時に咄嗟に逃げ込める建物形状
逃げ込んだ人に安心感を与える空間・建築



03 敷地選定

静岡県静岡市駿河区用宗

南海トラフ地震で甚大な被害が予想される地域から、建物による
津波対策を行いながら、海からの恩恵を受けている街を選定した。



津波浸水深

0 cm ~ 5 cm 50 cm ~ 1m 1m ~ 2m 2m ~ 3m 3m ~ 5m



用宗の特徴



シラス漁
漁獲量の9割を占め、街
の誇りとなっている。



朝市の開催
毎週末に自治体主催の朝
市が行われる。



舟持城跡
山の頂上にあり、街の歴
史を表す存在である。



庚申講と船霊様
地域のコミュニティの場
である庚申講を行う場に船
霊様を祀る。

既存の津波避難タワーで、最も
漁港に近いタワーの建て替えを
行う。最大浸水深は5mである。

04 設計手法

習慣

地域に根ざした神社は
住民の「習慣」として
存在する。建物の利用
が習慣となることで、
防災が習慣となり、い
つもいる場所としての
安心感が生まれる。

住民

観光客

漁港
関係者

船霊様と庚申講

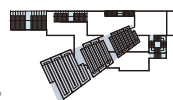
用宗の風習である船
霊様を祀り、庚申講
を行う場所を設ける。
災害時、神様の存在
は、守られている安
心感を与え、避難者
の心の拠り所となる。



「神社」
的存在として

明瞭な避難経路

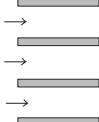
全方向から見
える避難経路は
避難タワーとし
ての象徴となる。



避難時
の安全
性

壁式ラーメン構造

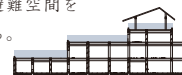
細長い敷地に対して、
壁式ラーメン構造を用
いることで、津波の波
力を受け流し、漂流物
を滞留させない。



構造的
合理性

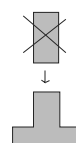
段階的な広場空間

セットバック形状を生かし、
段階的な避難空間を
設けている。

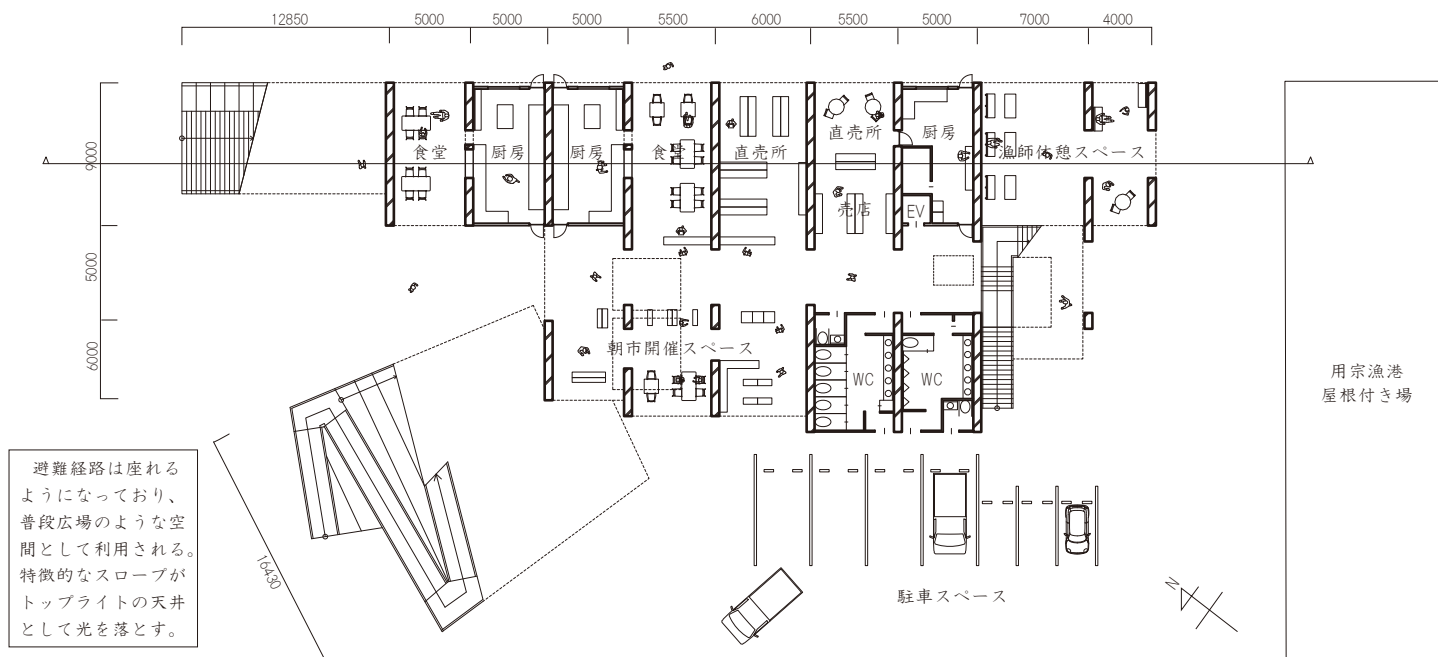


基壇型形状

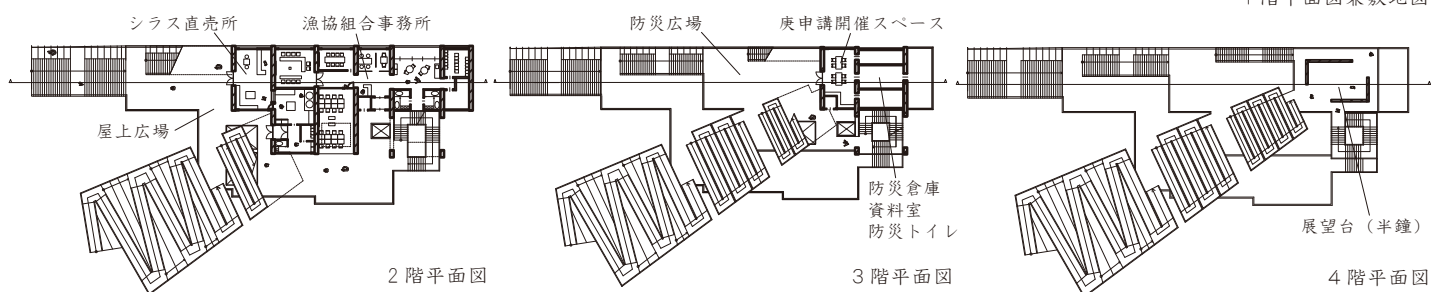
タワー型よりも設置
面積の大きい基壇型
の方にする事で津
波に流されにくい構
造となる。



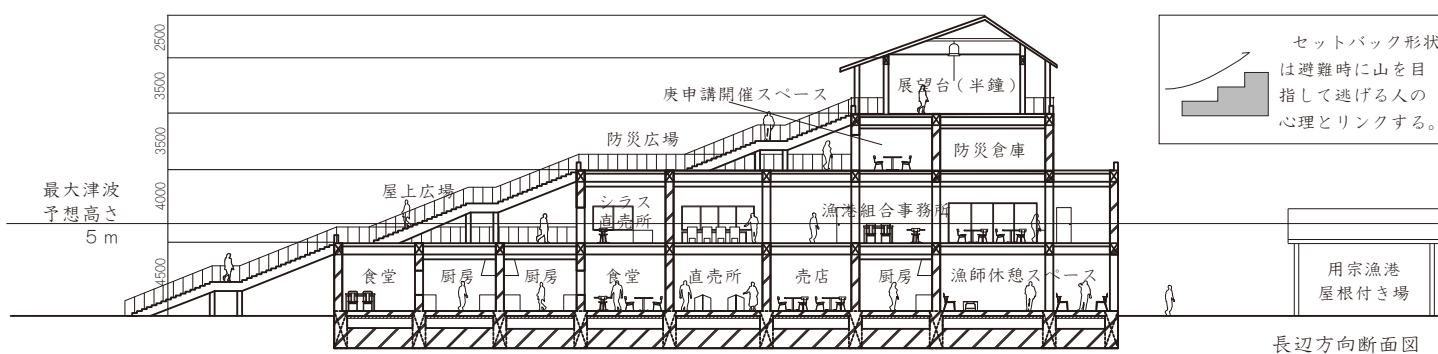
05 平面計画



1階平面図兼敷地図



06 断面計画



07 模型写真

